

## セーフコミュニティ再認証にかかる事前指導の審査員講評要旨

### ■全体（評価できる点や、審査員がチェックしている点等）

・（セーフコミュニティ活動を始めて）7年の間になし得たことに自信を持ってもらいたい。それに加えて、現時点で何が課題かということをしっかり分析しており、それに対してどのように進んでいくかという方向性を示していることが印象深く、感心している。なぜならば、問題解決の第一歩は問題を認識することだからであり、それについて歩みを進めていることは非常に重要である。

・栄区のすべての報告に共通することだが、セーフコミュニティを通しての気づきや学んだこと、何が変わったのかということを確認している。さらに、現在何が課題か、何を問題点として抱えているのかということを確認し示しており、それに対して今後どのように取り組んでいくかという、3つのポイントを最後にまとめて示していることは素晴らしい。問題を認識しているということは非常に大切なことなので、それに対して実際にどのような方向で取り組んでいくかをきちんと示している。素晴らしい取組をされているという自信を持って、これからも続けてほしい。

・申請書の中には、「何をやったか」は記載されているが、「なぜそれをやっているのか」という情報が含まれていないので、そこが一番知りたい。

・研究者は「何をしなければならないか」を考えるが、行政に従事する人や地域の人は、「どうやってやるか」を知る専門家である。そして、最後の1つの専門家が、コミュニティそのものである。地域の方々は、自分たちが住んでいる街の文化や、地域がどのようなものか、何が問題かということをよく知っている。よって、内容については地域の方が一番よく知っているということができる。地域の方々は、誰が、いつ対策を講じれば良いのか、よく知っている。先ほど私が説明した5W1Hのうち、研究者は「What」、行政は「How」、そしてコミュニティの方々は自分たちのことをよく知っているので、セーフコミュニティに取り組むにあたってはその三者が一緒になって取り組まなければ、5W1Hは実現しない。それによって、取組はより根拠に基づいたものになり、さらに実現可能なものになる。つまり、私たちは「研究者」「実務者」「コミュニティに住んでいる地域の方々」の3つの分野の専門家が必要であるということに心に留めておく必要がある。

・私たちが 心配しているが起きていないこと、起きているのに心配していないこと、そのギャップが難しいポイント である。どちらの対策も行うことができれば、それが最も良い。ただ、「安心感」を高めるための取組は必ずしも「安全度」を高めることとイコールではない ということは心に留めておく必要がある。

・栄区の場合、ロジックモデルを使っているが、その中で 「ステップ1～3」という独自の言葉を使っているので、ロジックモデルの中でステップ1～3がどのように位置づけられているのかという全体像を示すことができると良いのではないかと。ロジックモデルでは、突然しっかりしたゴールが作られるので、それに向けて 意識の変化、意識の変化による行動の変化、行動の変化によるけがの減少という3ステップで評価されていることを示せば、よりゴールと評価がつながると思う。「ハドンマトリクス」というものがあるが、それは、ステップ1として「起こらないために

予防する」、ステップ2として「起こった時に深刻化しないために対処する」、ステップ3として「起こった後に再発を防ぐ、件数が増えないために対処する」というもの。「起こらないように」という考え方が最も重要だが、「起こった時」や「起こった後」にどうするかという違う段階での予防も併せて行っていくと、多層的に取組を広げることができる。横軸が時系列で、「起こる前」「起こった時」「起こった後」、縦軸が「人」「もの」「環境」という表になっている。それぞれの枠に何ができるかを書いていって示せば、非常に科学的にものごとを考えているということがわかるので、それで一度整理するというのも一つの方法である。

・指標4（④根拠に基づいた取組を実施する）は、セーフコミュニティを進める上で非常に大切なポイント 申請書の作成やパワーポイントの修正の際には、大学の先生の調査の結果や他の自治体だけが減っているという成果を補足情報として付けておいたほうが確実にプラスになる。KYT（危険予知トレーニング）を事例にとって説明すると、KYTとは何かという説明をもう1枚くらい増やしても良いかもしれない。まず、KYTとは何かを説明し、実際にこういうところで行われている、という説明を入れられると、理解を深めてもらうことができると思う。またそれは、セーフコミュニティの指標4「根拠に基づいた取組」を示すことにもなる。

・（リスクを知っているのに対策をしないという）ギャップを埋める一番良い方法は、やらない人になぜやらないのか聞くことである。なぜなら、対策をやらない母親は、やらないことに関してエキスパートだからである。なぜやらないのかという理由は、彼女たちが知っている。教えて受け入れないということは、何回同じことを強く言ってもだめで、彼女たちが変わらない限りは変わらない。なぜ変えないのかということは、変えないことの専門家に聞くのが一番良い。教える前にまず聞くことにチャレンジしてほしい。

・何人にアプローチしたのかということも大切だが、それがどれだけのカバー率か、どれだけの家庭に必要な情報が届けられたか、手を差し伸べることができたかということが非常に大切。

・最初に設定したゴールをそのままにしているのではなく、常に振り返りを行い、その時々で何を改善しないといけないかを認識しながら、実情に合わせて取組を統合したり、増やしたり、変更したりという経緯を見せてもらったのが非常に良かった。取組を行っている中で、データの分析からどのように軌道修正して現在に至ったか、そして現在抱えている問題は何か、今後に向かってはどうしていくか、という風に、過去、現在、未来をつなげた形で説明されていた。一貫してどの分科会もそういった素晴らしいストーリーを示していただいたので、そこはぜひこのまま続けてほしいと思う。本番の審査の時も、そこをしっかり示すようにしてもらえれば良い。

・今のところドメスティックバイオレンスに関するデータはあまり表に出てきていなかったと思う。世界中でドメスティックバイオレンスは問題になっているので、問題がないというわけではなく、問題が表に出にくいということだと思う。他のデータのように、客観的なデータを入手しにくいとは思いますが、どういう状況か確認をして、それに対してどういう取組をしているということを本番で見せられると良いのではないかと。世界的に関心が高まっていることでもあるし、審査員はその部分を聞きたいと思うので、もう1度確認することをおすすめする。（白石先生コメント：指標3のハイリスク集団への取組の部分などで説明できるかも？）現在こういう状況にあり、それに対して既にいろいろ取組をやっている、ということや件数が少ない、ということを示してもらえればそれで十分だと思う。

## ■プレゼンテーション方法について（テクニク的な部分）

---

・審査員は7つの指標についてチェックをしながら聞いているので、指標のどれに該当するのかわかるように工夫をすれば、栄区が取組が7つの指標に沿っていることをすぐにわかってもらえる。 どういう風に7つの指標を満たしているか、活用しているかが大きなポイントになる。審査本番で取組を報告する際や、申請書を書く際には、そのポイントをアピールしてほしいと思う。

【参考】認証取得のための7つの指標

- ①分野の垣根を超えた協働を基盤とした推進組織を設置する
- ②両性・全年齢、あらゆる環境・状況をカバーする長期プログラムを継続的に実施する
- ③ハイリスクの集団・環境および弱者を対象としたプログラムを実施する
- ④根拠に基づいた取組を実施する
- ⑤外傷が発生する頻度とその原因を記録するプログラムを実施する
- ⑥プログラムの内容・実施行程・影響をアセスメントするための評価基準を設定する
- ⑦国内外のセーフコミュニティネットワークへ継続的に参加する

・大切なのは、「何をしてきたか」ではなく、「なぜ」「どういう風に」取組を進めているのかを見せてもらうことである。現地審査の際は、「Who(誰が)」「Whom(誰に)」「When(いつ)」「Where(どこで)」「What(何を)」「How(どういう風に)」の5W1H、6つのポイントを押さえているかどうかを頭に入れて、説明してほしい。

・（再掲）栄区の場合、ロジックモデルを使っているが、その中で「ステップ1～3」という独自の言葉を使っているので、ロジックモデルの中でステップ1～3がどのように位置づけられているのかという全体像を示すことができると良いのではないかと。ロジックモデルでは、突然しっかりしたゴールが作られるので、それに向けて 意識の変化、意識の変化による行動の変化、行動の変化によるけがの減少という3ステップで評価されているということを示せば、よりゴールと評価がつながると思う。

・（再掲）申請書の作成やパワーポイントの修正の際には、大学の先生の調査の結果や他の自治体でけがが減っているという成果を補足情報として付けておいたほうが確実にプラスになるので、ぜひ付けてほしい。今回は出典を小さく書いているが、もっとしっかり示したほうが良い。申請書を記載する際にも、これは自分たちが勝手に良いと思っただけでやっているわけではなく、きちんと科学的根拠を確認した上で導入しているということを示すことは、指標4「根拠に基づいた取組」であることを示す重要なポイントである。教授の顔写真でも入れたらもっと良いのではないかと。

・気を付けなければならないのは、ここで言うKYTのような略語である。KYTは危険予知トレーニングの略で、日本人にしてみれば納得できるが、英語圏の人が聞いても何のことかわからない。他の分科会にもすべて言えることだが、申請書を書く際やパワーポイントの資料を作る際などはそういったところに注意して、欄外で説明するなどの工夫が必要。

・「何を示したいのか、ストーリーは何なのか」ということ、そして「何を使って示しているのか」ということ、これは例えば今はパワーポイントを使っているが、他の方法も検討する中で何が一番効果的なのかを考える必要があるということである。そして、「誰がそれを伝えようとしているのか」、「誰に伝えようとしているのか」ということである。ストーリーをいかに伝えるかということが重要

・「何を一番覚えておいてもらいたいのか」「何を一番伝えたいのか」ということをイメージしながら伝えることである。どうやったら効果的に注意を引き付けられるのかを考えるのも一つの方法。（例えば、ヒートショック対策にあたり日本のお風呂場の特徴を説明する写真が貼付されたスライドで）青い光を使うととても寒そうに見えるなど、視覚的な効果を使うことも一つの方法である。また、浴槽からは湯気が立っているようなイメージにすると熱そうに見え、寒い脱衣場から熱い湯船に飛び込むことが想像しやすい。

・日本の他の自治体では、報告の後に関係する方たちが体験談や感想を話すところが増えている。皆さんがどうやったら伝えやすいか考えて工夫してみてくださいと思う。

・本番に向けて、右の脳も使うよう審査員にアプローチしてはどうか。右の脳を使うためにどうすれば良いかと言うと、感情や心にアプローチすることが必要。先ほども申し上げたとおり、何を伝えたいかということによって、うまくそこを使い分けてもらう工夫をこれからしてもらえると良い。伝えたいメッセージによっては、統計の方が伝わりやすいかもしれないが、補足的に人々やコミュニティに関するストーリーの事例を提供することで、両方の脳を使って皆さんの取組を理解することができ、より効果的に伝わると思う。

■各分科会に対するコメント（具体的に指摘があった部分）

-----  
《傷害サーベイランス分科会》

・病院で収集するデータは私たちが必ずしも欲しいと思っているデータではない場合がある。例えば、病院で記録されているデータは、けがの症状や種類が中心になるかと思うが、セーフコミュニティで必要とされているデータはけがの原因や、どのような状況であったか、どのようなメカニズムであったか、どこでけがをしたかという、予防に資する情報である。よって、必ずしも病院のデータが入手できたからと言って、すべての情報が入手できるわけではないということは私たちも経験している。病院のデータだけではなく、今収集しているデータと補完し合いながら、より「使える」データにすることが大切 だと思う。

《防犯対策分科会》

・振り込め詐欺と併せて今後は自転車盗などの乗り物盗についても対策するとのことだったが、そのどちらも、「Safety」ではなく「Security」の分野の取組になるかと思う。せっかくセーフコミュニティという枠組みの中で取組を行うのであれば、「Safety」＝心身の安全にかかわる問題にもぜひ着目してほしい。振り込め詐欺をきっかけとして次にどのような被害が発生するのか見ていくことも、セーフコミュニティの取組として大切なポイントだと思う。そういう意味で言えば、「Security」だけでなくその周囲の「Safety」の部分にも目を向けることは、直結する問題の解決だけでなく、さらに根の深い問題にもアプローチできることになる。指標4にも関係するアドバイスだが、どのように根拠に基づいた取組が行われているのかを「心身の被害」という視点からもう一度見てみたら、新しい点が見えてくるかもしれない。一度それを考慮しながら皆さんで議論してみることで、さらなる改善につながる可能性がある。

・スライド4：神奈川県や横浜市と刑法犯認知件数の実数を比較しているが、比較した際に多いのか少ないのかが分かりづらい。「人口1万人あたり」といった表記等をすれば、栄区が多いのか少ないのかわかりやすくなると思う。

・今日説明してもらったように、振り込め詐欺で自殺まで至る方や、アルコール中毒になるほど自分を追いつめてしまう方、家族と断絶してしまう方や孤立してしまう方もいるという基本のポイントをしっかり押さえて説明をすることも重要。そういったことをきちんと説明した上で、栄区としてどうして取組を行っているのか、何が一番効果的なのかを、全体像を示して説明すると良いのではないかな。

《スポーツ安全対策分科会》

・（「構成団体を中心とした区民の自発的な活動の中で、アンケートに基づいて取組を実施してきた。学校については、学校教育という枠組みの中で教師がついて実施しているものなので、これまで取組の対象としておらず、データも存在しない。」という説明に対して）データの中に学校でのけがについては含まれていないということが説明しきれていない。

・歩く歩数と骨密度の関係など、世界中に様々な事例があると思われる。そういった情報を根拠にすれば、これから取り組むことになる人にも参考になると思う。一度事例や研究成果を探して、ツールとして使ってほしい。また、

来年申請書を作成する際にもそういったデータを示してもらえると、自分たちにとっても良い情報になると思う。例えば、1日1万歩歩けば良いとよく言われるが、おそらくそれにも根拠があると思う。実際に歩いている人と歩いていない人の差などのデータを見て、国などが言っているのではないか。そういう事例があれば示してもらえることで、何となくやっているわけではないという証拠になる。おそらくいろいろな見せ方があり、1万歩というのも一つの見せ方だが、30～40分の運動を週5回すれば1万歩に匹敵する運動になるという研究の成果を見たこともある。いずれにせよ、根拠に基づいた取組であるということを示せると、面倒だと思っている人もやる気になるかもしれない。

・こういう道を歩けば安全、などという情報提供も役に立つのではないか。

#### 《災害安全対策分科会》

・災害への備えは重要だと感じているにもかかわらず、感震ブレーカーを導入していなかったり、防災訓練にも半分程度しか参加していなかったりと、大切さを知っ~~て~~ながら実際に行動を起こせていない人とのギャップがある。既に知っていることを重ねて言って押し付けても限界があるので、「なぜしないのか」と聞いてみるということは一つの手段である。

#### 《こども安全対策分科会》

・既に栄区では養育者にアプローチして情報提供し、それが実践に移されているか確認しているということで、それは非常に重要なこと。情報を与えているから親がそれを実践するだろうという考えは甘く、行動と知識はリンクしているわけではないので、そこに着目し、これからも工夫していくと良いのではないか。

・気を付けなければならないのは、ここで言うKYTのような略語である。KYTは危険予知トレーニングの略で、日本人にしてみれば納得できるが、英語圏の人が聞いても何のことかわからない。他の分科会にもすべて言えることだが、申請書を書く際やパワーポイントの資料を作る際などはそういったところに注意して、欄外で説明するなどの工夫が必要。

・インターネットのいじめについては未知数なので、日本でもこれから起こり得る課題として見きわめながら取組をしてほしいと思う。

#### 《児童虐待予防対策分科会》

・スライド4番について、ここで言いたいのは、子どもの世話をした経験がないから子どもを初めて持った時にどういう風に対応したら良いかわからず孤立してしまい、そのために児童虐待に走りやすいということだと思うが、論理的にそれを説明することはできるのか。また、スライド7番～9番について、いろいろとデータを示しているが、事実を示して「〇〇が必要」となっている部分に関して、「なぜ？」と思うところが多い。例えば、スライド7番については、横浜市と栄区の違いを虐待の種別で比較しているが、だから子育てサポートが必要なのはなぜなのか。なぜ心理的虐待が多く、それがなぜ子育てサポートにつながるのかという説明が聞いていて掴み取れなかった。スライド8番については、横浜市と栄区の虐待者別の割合を示しているが、どちらも加害者として実母が多いのはなぜなのか。オーストラリアでは虐待者は実父が多い。また、スライド12番について、どうしてここに書かれていることが

分かるのか。なぜ地域全体で子育てを見守る地域づくりが必要なのか。なぜ地域のつながりの希薄化によって育児が孤立化しているのかなど、4つの項目がどうやってわかったのか。初めて聞く者には、やっていることとその理由、背景がつかない。おそらく日本人としては社会情勢や国民性が何となくわかっているため、自分たちで行間をつなげているのだろうが、海外の者には行間をつなげるだけの情報がないので、なぜこういう風に言えるのか、唐突に見える。12 番目、13 番目のスライドは、なぜこの取組をしているのかということを理解してもらうために、非常に大切なポイントになると思う。審査員としては報告の内容を理解したいと思うので、より理解を深めるために今伝えたような情報を追加してもらえれば、やっている取組の理由を知ることができ、納得できる。

#### 《高齢者安全対策分科会》

・「ヒートショック」というのはピンとこない。もしかしたら和製英語かもしれない。説明を聞けば何のことだかは分かるが、英語として聞くと不自然に感じるので、どういふものを説明してもらえて良かった。

#### 《交通安全対策分科会》

・スライド 24：根拠に基づいた取組だと説明するためには、なぜスピードが減少したことが成果だと言えるのかをまず示さなければならない。そのために、こういったものを見せて、スピードが約 10km/h 減るとこれだけ衝撃が減るというのを見せられると、より分かりやすくなるのではないか。本番に向けては、「なぜスピードを落とす意味があるのか」というところをしっかりと示すことと、車の減速によってどれだけ事故が起きた際の致死率が変わるかなどを併せて示すことができれば、取組をする理由として説得力が増すと思う。